奥州志 附 下

ヲ多 9
2295
4 止

ヲ多9
2295
4止

香道秘傳附孫奥之栞下

大枝流芳 著

○宗入香炮圖一巻考

小川の中志野入道相傳之旨紀るはし

あきづ志野家の門弟なるもの

傳ひきぐ委考ども

元龍四年八天正元年と改元あるべ

天正の考と同じ国てら

小畧と
香炉十七品乃圖形とあるは後世よ
りたるとはいへども香炉の形いろく
あるものゝ見よかばるべしと雖
をあらひなどさゆくあるまゝ
別よりも圖は陽の和尚家より傳
るものゝ別よりも
二ツ香炉ゝ二ツ香炉一付を

同名にて形に異なる事の香志乃思梅
よ博山炉なるべきと書しかども圖
と合せみるに
ばくせちに博山炉乃遺法もあるべき
ら今は邦乃内泉の寺及大徳寺の心
寺等乃ち今よ所香と名付て沉香
そに山のばくに炉にて香炉の事よ言る
たりかやうの炉と云やるべし小片香大

序香とて今みられ
やや香炉生言僧乃燈とよ今用るか
猶乃香炉なり上よりやわり極乃形よ似
るみるもやとと云よ茶家乃考よ所
をしてとぐよ事合の鑒ならん事と
ぞ東山殿御所御記と大屋香炉
とかきたるれば古やこれなるべしひと
と和刑色て同じ

同香炉ハ行乃節香炉なり先
と貴教とも一重ロ乃ものに用也
青磁なり同香炉い組香ごとに用也
ろ仕波つて二すみ方外なるとは
とと小さい中ものにわ
桶ゞハ香炉も磁器なり
中とり香炉古板乃圖ま是わりと
多く民間まわるものに大家香炉ま

とぐ長なり類聚雜要の圖よい長
あるものと載かるもてるよ單蓋あり
下へ多くいはまて・ぬる漆塗みて
梨地蒔絵か多てあり火もてかゝ
り物をて同じき香炉へ入れかゝる
なり
志野香炉い張美なり
四方香炉も張美なり考所の所よ
あり考合ゞ色し
内ろ香炉いるもて作る香志の中
よ委く考ある
襟香炉るも張美まあるし
ものて香炉とゞる香炉こも名のお
内由まゞ考ゞどるも張美ものを
兼香炉火作香炉こも形ようて
名付しとりんゝとりとゝふる称芸

香炉すう
鴨の香炉鶴鶴香炉青磁もかしもま
わりあひらひ京よりすう柳よりの香
炉を同家すう
炉の形ぐ圖のごとく寸数れ助い
しもの方と同也
六合四合の炉れ押形ち書ハ右旋の
圖すう古旋よりすると云説もあり代猶

別よりて内縁を今義ハ不論又炉
の界を刹と付合と云事和わる也
四方香炉の炉ハ四合なり圖のごと
ちうしなども香炉炉ハ是時ハ是わるも是也
をもと爲て一ハ角と是家とすべしおよ
わる角香炉の圖もすこかけく是
圖すう利休間書秘傳と云書ハ角
香炉ハすこうけて是事とのせうの炉も

そもんはやあるべし此本書ハ圖と沒め
どうりてあふさ位と出て沈ろ
み合ようろ小けし付げると紛の所
と云ひ書の圖と余が傳ろ所とかく
ちびひろ是い象圖れ是ろ
三合ようろて小ろ是ろ所る
是ハ圖も余が傳ろ所とかちびひ
ん書みた象圖とあて五段

裏畧ぜろ附ハ是前にだろけしめ紙
付ろなろたハけし事を後勝の沈よ
ろてたる
二重香煙けしめある二重香煙を
所み合ろ是いろ紙ろあるにろて
所六合と定ろ是ろ事ろの沈香煙ろ
みて作ろしろの
是まで香煙十七所の押ろ七所

和書の當と合考べし

七十二の勝負卓の墨合なり仮名

口決多し此勝の圖多し余ぶ得る所

別に一冊となし筍ふかくと云角八角

乃至わりのわひらひ書になり

別にまひわり

ろう勝の事深き秘訣わきども師

家より秘して傳ふべからざるなり

述がゝ粉龍乃燭卷かろかし

の形ち宣和博古圖に載り

香色小色大色ますに法大概圖乃ごと

別に法いす法類の書一卷あり志野

家に用ゐる古乃香爛か書のごく

杉にて作り又竹の皮付にても作る

寸法別にあると香色に香の名と法

付る事圖乃ごくもゝ又かゝ法を

又伝もあり
奥書の中に曇鸞の釋迦佛といふ
建部澄勝い其伝千代乃枯よ委く
載るべし
聞香抽知ふ釋氏書中の石徳
又天正の年号者
道三ハ醫師道三なり翠竹菴と号
香業乃重人なり武伝小日醫師乃三

ハそのゝ公方家ゝ東大寺祥伝乃
事ゝ相國寺盛都も道三ゝ門弟也
云れバ香とハ事喜
此奥書と考ふ宗入ゝ伝書
道三ゝ家よ傳し建部氏乃写にて
うつして写し世ゝの奥書なるべし

○建部隆勝香之筆記考

此書は宗信筆跡乃貴書なり
雖よ其人未詳と云隆勝が宗信
よりあるは孔子の後亜子あるがごと
鎌倉の意地ふ香炉とりばござる事
子細あり事なり又他は紀他いろく
云あり口決なりでい委くあるべかず
又はめ二ばごぎ香炉よ付ものあり

器信ようの事なり此書より紀
ろ学香炉とかぎ香炉ともそのこと也
ろ古紀学はうる紀香炉と多くりもり
類としるもの中しどど
たどんの法多しとくども律国帝庫
つくあぎ学よくいなり建部氏乃
云のぎくもて法も定しあ三寸
又六分の間香炉より紀行もり香

焼大くい大なる炭をでいかにかあく
どわる香焼匂論大なる火あく
又暖氣の時と厳寒乃時とは火ようがん
ちがふものなり余多あるとは試なり
そもん得わるべき事なり
香盒と袋ふ入るい香氣と洩と迫
きためなるべし
名香いそ焼まくどと吹組香など

ふ月ろ事わるい
宮中西中ふ香と焚事ふ法あり
ふも論ぜりとも小香志ふ載ら
名香十一種ハ包折やう別ふとべき事
うちうんぜ色どもりんいけ易かんふあ
なり
香合ふ香包張入板ふ傳宗入香焼圖
わるふへやうの圖わる合考べ

沈のす法宗信乃張り小し合べ
しいづるの見たる事とおもふ
鶴香炮わひらひ宗信乃張り同
うして同じ器せり宗信の張と
同べーの字を入て鶴の字小補り
火打袋ゑの由来久し礼内則云左
佩紛帨刀礪金燧云々されば紛
ゆふてきりかけ事わり

とりてゑうさまゑる採薬老の詠楽よ
をさ者ゞや薬袋とさぐる事わり今
乃作のちやい薬人の袖どれきりひり
の詠ゑ用ゐる木のゑ梅して針金ふ
て所くまきりをのゑり書紙左馬が火
打袋の袋とかめり川ゑ落しゑる事わ
ゑびきちい張ゑ火打袋とさげし
とりてゑり

ける紙のわひよへる香をそなへと云ふもの
宋山殿の形をあらかはらつものよへて物系
せちや
沈外の額何ともとあるを沈外なる
加賀深子細あり
香箱のもの桜ゑ色い火箸あるべきふ
香箱とかきて事とをもつ今いふ香
箸本所ぐと云しあと

火筋と云ふものい香げと云し
ものもう今も世人い火筋と香箸と
のをいもうもしい香筋と云しわ
る篠をと云い白銅をて作りし
ものもう宋渥乃出よりをしう
ゆえ三十三ケ条あり此い本所
かり
見もう石書本所のりちちう

伽羅　三十二種　新伽羅七種　羅國十一種
芸那斑　十二種　真那賀七種
新伽羅ハ後ヨリ渡ル伽羅ヨリ別
ヨリ新伽羅ト云ヒ古ヨリ伝ハリタリ
熟ー伽羅　羅斛　満剌加　真蠻ハ
小南方海外乃國の名也　後世薫門
答剌　差咀羅乃二種の香を用て
六國と名付ル也　沉香ハ

ハ六國乃名目なれ共事ハ代の移り
考の世ニ成ル事ハ明の考證を
博補の香志よりの世ハ代の移り
載ルやく仙芳冷祖とサソラたりとハ
人わもども誤なるべし長崎西川氏乃
書華夷通商考にハ薫門答剌國と仙芳冷
祖島と云とあるバスモダラと同國ヨリ
サソラハ南蠻の中迦摩縷波國の事

室利差咀羅國わうもやサソラかど
太泥も國の名なりとぞく六國と云名目
八南海よりなり本所と云なり本所と
聞るなり事香道の名家なり
此奥書も俊勝のきてんよりかくられし
筆記なり
此本志野家六十一種の名香の聞
なり後世の考ともなり事実也

ぞく多し
紅塵一名紅沈也八楊貴妃つとめ香の也一
説に云伽羅に桜に妃加枝を好む加枝
一名紅塵と云八伽羅にさ縁ありてや名付
めん書云故事にとくなり
鶴鴿沈事小さるさまてぞく一本乃
名めて香の名はわるど委き考
い香志に載伽羅沈香の中の一類なり

そくたちの香ハ名あるそい沉香よ
屬し伽羅よハ四種の品類あり
ゆ上馬まで志野六十一種乃名香の
聞るうち中降勝たしるハ不聞を
の二十二種あり降勝乃内よりや六
十一種をぶかよそ訪ひ伝ることを
えるう宗信ハ名の好といひたの
事をそかくふてそろ爲きふら

やうにけぶりなるの中二種あるをバ
後世乃人今ふいうて生物なれ事柴
をぶし世をる細をるの多くハ贋物
して生物ある事かくを多くハ後乃
事をぶし香と鬻をの贋物をハ
てんと端をふハ高人のをぶるれぞ
御ぶるふたるぶを香道乃宗匠めけ
人又やハ罪あるものをいやー

いるかわらんいを也とおもへ
香道ハ秘事多しといへども本所伝
同別ら事第一乃香なり
鼻乃伝授のハ右手乃事一段ハ
はたらきて二息或ハ四息同たらて一息
又ハ三息ハ事と云ともいろ〳〵
ども対別ようたた右乃鼻孔の通ずる方
わり同対十二対の時とけう通ずる方

みて雪ば事もらく雪へんら宋愈埃席
上腐談曰歌知時辰陰陽常別以鼻
鼻中氣陽時在左陰時在右玄子
之交兩鼻俱通謂玉洞雙開是也
対ハとわく沈とそ
四季てしり香乃名と用る拙ある事
既ハ宗信の事乃中ハ難じ侍ら
大あひの事ハ書乃後用ゐべし宗信ハ

四文字ばかりにて茶よりとぶらし
けり奥乃文章にてみまぐれ老人へ指上
時永次の人へ添書せし彼書状ならば
定て公武の内なる者の方へ上られ
るものなるべし異本に道南と高名
なる書あり此道南は上宗拾が門
人なり宗拾は則隆勝が門人なるべ
道南が永次にて貴人へ指上申なるべし

○十組香之記考

先い古の十組香なるもの伝来
組と見ひ来しなり茶川氏乃法
よりて組ん事林の男より雑
どるがおろし十組香と記余が作る
所のものい真名序あり細川氏自
法乃作なりし由来なり十組香
自法乃茶なりあるものなり

筆をそめて記せりと細川氏のべし

十種香

十種香は書よ記せりて所い試す

乃十種香なり試ある十種香又別り

あるべしらあは試すと載らるたる事

ハ試あるものもの風情多くれば撰へ

らるべしなるべし

出家はいかくいかぶも学みきめもり

今ハ香はといふ事なるもの

香といふ

一客ゝ云ハ連中みて稽古を学しを

云なり點客ハ此也二人もの

点二つなり客にかぐべきをよ

なり

札と入ると今ハ札をおと云なり看巴

乃香合之記ものは打とかるたりる看

は入るまでもなしとや
点のうけやう前後もしどひらとあまり
とするなり後世は正傳の流わすれて
本書中は其沙汰す系圖香は
の正傳の事と云り
付字と云事今は営と云たる人は
むかしは香ぐしとよいつる其名の雅な
らぶるみやう千世うぐひすと名付

そなへたるべし雅人の作る事となれど
古歌の心をよりて名付給ふなるし
續後撰集
おもなくに枝きるけりも梅の花それ
香はそのにしてやうぐひすのなく
花かやうの古ちの心をやりとづきぬる
もち
札の絵と二字かく事四季にまりかお
聞香を庭でて心得まで通し

元と雪事ハ一段の奥なれども切なれ
人よわるばきハせざる事なり

花月香

本書記録の當ハ追加と同一圖なり
と心得べ一迎加なるまれば尤容なし
香元二人ありて月方花方と立ワ
引渡よりり香とくぐりやう香ハ結
口傳多一識なふ之ゆ雪ゆ別よ

異花月香　焚合花月香ハ之組
もあり

宇治山香

宇治山香ハ試ゆて後ゆ一種なり
で雪ばる事ゆ細わるゆ也ゆて後
の香登きくゆ。ゆ
名紙徳やうゆ代の枝ゆ安くのゆ
ゆよりゆ義ゆ異ゆ也ゆ

題ハ一人夢あ点二人ちハ一点たる
べし

小鳥香

小多香名目いしたきとみそさい
とうきせんきいをまめ四りと共し
書もあり外ハ三種まて雪小多香あ
つ題ハ一人きくいあ点とりハ仮もあ

郭公香

郭公乃字おりて用てぎとし
ふあらばまとも古ちハ仏ハ用てぎと
ハ用ハ用ちうぎとハ紙能ぞ
乃字を用んひ香ハとうも本紙
深ろちうとハ乃組香も本文り和
なきやうて墨ハ深ろあとわ分ちう
粉墨と製一用白製ちるハ注わ
又一人間ハ点とりハ仮もあり

小草香

さゐくのまの名にて同事あり

どもきゝやうゞりとゝ外よりきつゞ

さはみかへしの形分とて勝

事もわりとなり

系圖香

此組ハ同香別種の異同を勝つるにより

是人の血脉を訪るゞぶゝ同く系圖

香といふ武徳よ源平藤橘の四

姓より系一香ハ種と同るふゝりて系

圖香とゝなりと此仮鬢設めて同

るふりゝど又後世系圖香ふ名目と付

るも後人の附会ゆゝて名目何よ分

事とゝゝど高流ハ古ハよりゝび名目と

用ゞ源氏香の時ハ巻の名と事付べ

ゝ此の系ふ載るゞぶゝ三組香よ是ゝ

やはんとぐく三種香の名目もはぶく
なるべき事なり
八組よい五傍の巨のうけやうと奉紙と
雑しがく
本書よ云香八字つて四文字ゆゑ
小源氏香と共分り付い巻の名と圖
乃下ゆも札紙ゆ
右八本文の紙と桜よ山い源氏香

を香四種ゆて四十やうにりくく傍の
今い源氏香といで色相香文種
ゆてゆく二十ゆ色ゆて三本と
五色ゆて四十ゆりゆ八ゆでい源氏
文十二の名目よゆひく五種ゆてだ
ゆ相蔓美浮橋乃京後の二帖ゆは
番ゆ四種ゆて色四ゆ番ハ文十
ゆはゆゆまで八紙省略して書るか

ゆゑ〳〵今ゝ拳て後の考よ
とまり〳〵みつゝ引きみいたゞき
帝本とゝ習とゝの畠と除び四十八を
まは除ゑ
十性香機合
此組い連理香乃併みて基秘事ゝ
ゝ引ゝ口授とゝ師家ゝ引ゝ秘伝
せるゝのゝまゝ今ゝ向よ線ド

〳〵
又一の札と二乃札と二枚札筒よ入る
余落同ジ。此又表のおゝくゝまゝ
前一後二の前後一つ筒よ入ゝれ
がゝくゝ〳〵前後混ざりハ向ゝ
なゝべ紀孫の表かゝて書ゝ此
事いゝわん南流ゝ筒ゝに移
居と出ゝ一ゝ十と前後後ゝに札

とくさ　ちくさ　ちくさのいと　ちや

はなぐし

源平香

源平香ハ立物ある組香の始め旗を始め盤よ立て始一種聞高ざらん人ハ旗と始めるなり高さハ三寸ま立て

くるり大旗ハ三度計

ちり連中のちり後てしく聞人と二人

ちりひ大旗のまち始めとしてすむと

ツ伝あり此ちり旗の番本書に詳猶

すりぶく十二本ちり大旗ハ中小三度

小旗げりすむべし大旗ハ始終動ゞ

十組と名所香ちり組ハ事例の絲

小辯ど

鳥合香

鳥合とハ中宵作文多ち小鳥合わ

又ときこと事古今著聞集にしるし
侍名目をかく丸紙ども本書に載る所の
鳥の名は古今集に三鳥の傳授と有を
為乃名なり
十組の香乃あるを内かくれば秘事を
事は別に十組秘事考一巻筍に
くし侍

○香之雜記考

侍書凡例も倫ぜずおく祖人乃
作と云事をもくべと書中隆勝花
乃とりはからいの出なるべし
佐方乃も寫本多くあまべ百
年以来の書なるべしこれ則ち
以事条下にしるくあるを紙
辯ず

代書くづめ香沈香と云香乃作ざ
やうの事志野家建部氏もいとぶか
所久余が師傳みて記するもこれ
事いぐ傳うんいづれこの流うち来り
ものうちとて恐は中古の元化なるべし
こと記も高げる事うち記うち
わうし書たまでばみだりに削つと云
ぐく古板のまま本書よりうち

所乃押板の事代當いく押しうの
やうがく対し四季の所押板と云
事いうるにしし宗信の書八卦香幡
乃條下に辨じ給いいく俗法なう
ものを知ると余ぐ師傳みて記する也
香乃羽帚のうちひうを法うし建部
氏の後代書の加し法や世うち約まて
とりんてうう[illegible]て古人志野氏は乃れ羽

へらひぐそ小ゆひそのごゐまつと云
流と筆ら按よるあみてよ茶
ゐす姑て李益翁が流よみてゐ
書志に載る本邦まて後ものるれども
用て役なるものなゐまだ和用てゐ
南流も羽帝と用て後小指まてぬよ
紙今のそれら見古朱の遺法なる
屋し

南流ハ筋目一づ付ら志野流ハ二づ
川付や宗入の畠ま又ハ書ハ二づ
三方ら付らるもとゐ
清孔そハ屋家ハ不入と此法恐ハあ
かん志野の書ハ屋家ハたづ
ゐべしと云りハ法よるぐりんるめら
又清原和ハ仆付もまりまぎらゐ
ハ法も恐ハあるゐ清孔流しの

事ハ結るれど面接する事ゝ
たゞしたるものゝ一段の弦接ぎの中ま
辯ぶと
名相乃香焼する木の著て所とれ
あとをとゝまりて火弦へ出る事ゝ茶
川長ゝ切りて先ゝ節とて中と元高
ゝはり頭ゝきりとさかゝをせ火節を
あまるゝの付目ぶるゝ作まて

ものゝかゝくしてけくわゝぶるゝみ
用ゝとなるべし
元焼乃香の大さは志野建弟の書
にくりけ書乃弦へ大器なる弦ゝ
用がゝ
裏ハ香ゝきれゝ弦のぶゝと
ひぶゝも大器ゝぶるゝハ必裏ハ中きぬ
とも定がゝ志野の香合も文月るれ

び中夏かう只大暑の時は焚がゝ
暑よハそだきゝ夜の衾ハ沉
香ゝりハよくの白檀ゝを香すゞ
きゝのゝ名香ハ必ど暑よハ焚べゝ
どは外くるゝものそはぐるゝまゝど
香とつゞてあぐるハ指とわゝ丸
ゝ梅ゝ香ハ銀とふわぐ爲ゝ
ゝ能ぐゝわかゝ者いうゝ

せゝう伊意野の沈まはるに事ゝう
つゝ銀ハ香菊ゝて香とふわぐべ
唐紙ゝ香と包沈わかるぐきゝう志野ゝ
紙のぶく落ゝを用爲ゝ唐紙を
油と吸てゝくゝたわゝくゝるきゝぐき
ゝのゝハおゝき香ハ充てゝ作ゝね
紙ゝ包ゝゝ
香袋のゝ法書ゝゝくゝゝ赤筆書

みはこの伝わるまでもすべての制法の
ちまたに流れ出でしまれの多和合也
初めてあの事なり
さきたてしたおくたどんちうくわざ業
の事をばしらず建部氏の伝ちうち
ちうの香たどんの方わまるを
いにしへの伝二十六條あるあり
奥書にあるを云ばとく作

人の作る事いかまでの法のまちち
事をとらで

右香道秘傳の條目は昔人の著
述にて後世の人の解釈
を考えてはいたづらに
然ども先生ちうに深く秘してみだりに
伝まじき事と仰せ八今ものいう面

月さ事も古き事なれども又心得が
たき事わづかに今ぐ愚按を加へて折書と
物よ饗蘆の驥尾よりくのごとくかく〜

享保甲寅歳正月上浣

浪華隠士　大枝流芳記

香道奥の枝下大尾

大枝流芳子編集書目録

附録香志

古組香十只新組香十只　右同

秋乃光

新組香三十只
この書実の考多し　右同

千代の秋

古組栄川流の書
香色折形出るを図　右同

潺湲絲

新組香十只香道の古實
新六十種香名実和香木名実　右同

軒丸玉水

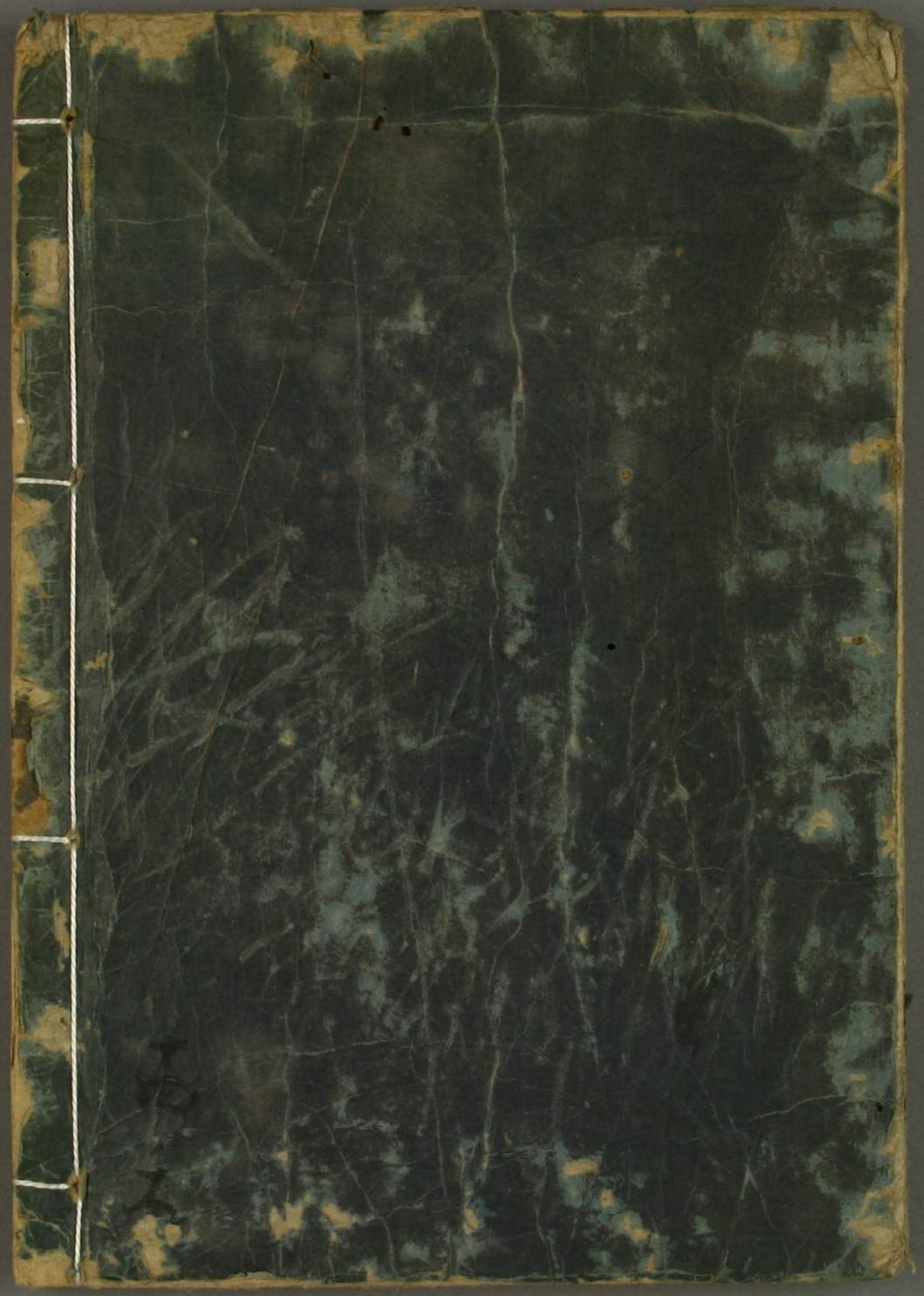
香道の古実と者と　来刻

千代乃古道

改正十炷香之記　附名香名寄　末

元文四年己未五月

京師書坊　堀川ゟ辻上九丁　植村藤右衛門　梓行

東都書林　通石町三丁目　植村藤三郎

摂陽書舗　ゟ篠橋ゟ丁目　植村藤三郎